

障害とパフォーミング・アーツ研究会〈第1回〉 要約

1. 研究会の主旨・目的

- (1) 参加団体のネットワーキング、情報交換、課題の共有
- (2) 協働の可能性を探る（課題を改善し、活動を発展させるため）
- (3) アーツカウンシル東京の助成プログラム等への意見・要望聴取
- (4) 2020 東京オリンピックの文化プログラムへの企画提案や、今後を見据えての構想等
- (5) その他

2. 参加団体の活動紹介

(1) 特定非営利活動法人シアター・アクセシビリティ・ネットワーク (T A - n e t)

① 活動内容

- ・鑑劇サポート（台本貸出、字幕等）のある公演情報の収集と発信
- ・支援方法の研究と実践（演劇専門手話通訳者育成、モバイル機器の活用、音声ガイド等）
- ・相談受付

② 問題意識や課題

- ・障害者が文化活動の場に来ない（参加できない）のは情報が行き渡らないから
- ・必要なのは予算の確保、支援のための技術開発、一般文化セクターの理解を得て協働すること

(2) 劇団山の手事情社/NPO 法人ニコちゃんの会（演出家の倉品淳子氏）

① 活動内容

- ・高齢の女性や身体障害者との演劇制作
- ・制約のある動きや手話表現を追求することの中に、一般的な価値感を逆転するような演劇の新たな可能性を見出している

② 問題意識や課題

- ・自己表現したいのに情報に出会えない障害者に、どうしたら情報が届くか
- ・障害者による演劇も、きちんとした批評を受けないと芸術性が向上しないのでは

(3) みんなのダンスフィールド

① 活動内容

- ・障害の有無にかかわらず、子どもから大人までが個性をぶつけながら身体表現をしている

(4) スロームーブメント実行委員会

① 活動内容

- ・市民参加型でプロのクリエイターと共にパフォーマンス作品を創作し、街中で上演
- ・パフォーマンス用の音の出る車イス等、企業と協力した技術開発
- ・アクセスコーディネーター（障害のある人がアート活動に参加するための環境を整える人）とアカンパニスト（障害のある人と一緒に創作活動をする人）の育成
- ・多様な人が集い参加できる仕掛けや場づくりに価値を見出している

② 問題意識や課題

- ・個人に情報が届かない「情報のバリア」と、介助者が必要・医療的な処置が必要といった「物理的なバリア」、そして「精神的バリア」の3つのバリアがある
- ・鑑賞支援も創作支援もつながっている。鑑賞者の増加⇔表現者の増加になる

(5) 日本ろう者劇団（社会福祉法人トット基金）

① 活動内容

- ・1982年に黒柳徹子氏がニューヨークで「ナショナル・シアター・オブ・ザ・デフ（NTD）」というろう者劇団の公演を見て、「視覚的に優れた人」の演劇をつくろうと創立。（現代演劇もやるが）手話狂言に力を入れている。近年は海外公演が増え、国際手話にも取り組んでいる

(6) 特定非営利活動法人エイブル・アート・ジャパン

① 活動内容

- ・1994年に発足。アーツ千代田3331に事務局とギャラリーを構える。障害のある人が当たり前前に文化芸術活動に参加できるよう、必要だけれども今はない仕組みやアイデアを社会に発信すること、ベースとなることへの取り組みを重視している
- ・2003年から5年間、パフォーミング・アーツ分野の人材育成を目的に「エイブルアート・オンステージ」を実施（明治安田生命社会貢献プログラム。毎年8団体を目途に150万円の資金を提供）

② 問題意識や課題

- ・いかに障害のある様々な人たち（福祉施設以外の在宅の障害のある人、手帳を持たない障害のある人、先天性の障害ではないけれども社会の中で生きにくさを感じている人含む）に情報を届け、参加を促すか
- ・一般の文化活動セクターの人たちと本当に協働できるのか
- ・東京の持つ人材、資源、お金、そしてオリンピックというチャンスを、どうしたら地方に届けられるか

(7) 特定非営利活動法人シニア演劇ネットワーク

① 活動内容

- ・ 2011年より隔年で「全国シニア演劇大会」開催、劇団員 40 名の高齢者劇団「かんじゅく座」の運営、音声ガイドの制作

② 問題意識や課題

- ・ 高齢者が演劇を通して元気になるという社会的な意義を、いかに発信できるか
- ・ 劇団員の家庭状況の変化や身体の衰え・病気等、長年活動していくと一括りにできない多様さが生じてくる。個別に、細やかに対応しないと活動を継続できない

3. 意見交換で話されたポイント

➤ 芸術活動へのアクセスと支援者

- ・ 障害者の芸術活動は（創作も鑑賞も）、当事者だけでなく支援者がいて成立する仕組みが不可欠である
- ・ アクセスコーディネーターのような仕事を必要不可欠な専門職として扱うこと
- ・ 手話通訳、医療的な処置、介助・介護等、障害のある人の多様なニーズに応じるには、支援者をネットワーク化していくと良いのでは（スロームーブメントのアクセスコーディネーターとT A - n e t の手話通訳者等）
- ・ 現行制度では支援者の仕事（手話通訳、介助者等）の対価が非常に安価に設定されている。高度な専門性が必要なプロの仕事のはずだが、対価と社会的な評価が伴わない
- ・ 難しいのは、障害のある人からの要求をどこまでを引き受けるか（正当な要求なのか過剰な要求なのか）判断すること

➤ 障害者割引等、サービスの内容

- ・ 当事者に相談した時に「逆差別になる」という反発もあり、同料金にする代わりに介助者を無料している
- ・ 割引よりも、劇場内での聴覚・視覚・身体障害向けのサポートを用意して欲しい
- ・ 身体障害の場合（劇場までは福祉タクシー等を利用して行けるので）そこから先を手伝ってくれる人が劇場にいると助かる
- ・ イギリスでは舞台通訳者も一般的。聴こえる／聴こえないは関係なく、劇場に字幕があるのは当たり前という考え方がある
- ・ サービスの内容については、まずは当事者に希望を聞いて欲しい

➤ 団体運営・財政面

- ・ （NPO 等で）報酬を伴う専従スタッフがない場合、活動を広げていくことが難しい

- ・ 有償の専従スタッフがいても低収入であることが多い。兼業するなど多忙である
 - ・ 創造活動に必要な予算不足（赤字分を自己負担することが多い）
 - ・ （表現者としての活動の場合は）少額でも出演料を支払いたいが、難しい
- **福祉制度**
- ・ 自治体等に手話通訳者や介助者（介護士）の派遣を依頼するが、制約が多く、利用しづらい。ただし自治体によって制度は異なる
 - ・ 世間的に「演劇≒趣味、遊び」と考えられているため、そういう場への手話通訳者の派遣はNGの場合が多い。介助者（介護士）の場合「旅行」では利用できない、等
 - ・ 抜本的には福祉制度を変えていく必要があるのでは。当事者が訴えることが重要。賢く連携して、行政に働きかけてはどうか
- **人間の権利として**
- ・ 障害があってもなくても、高齢になっても、「やりたいことをやりたい」。障害者も高齢者も、当たり前文化芸術に参加できることが大切である
 - ・ 芸術活動へのアクセスのサポート（手話通訳者や介助者）が、どこまで生活に必要なこととして制度的に認められていくかも、根を同じくする問題である
- **プロフェッショナルな表現者を目指すには**
- ・ プロフェッショナルを目指す場合の課題は二つ。一つは、趣味や余暇としての演劇とプロフェッショナルとしての演劇の線引きが現状ないこと。もう一つは、（身体障害の場合は）創作のためのアカンパニストのような支援者が必要なのに、いないこと
 - ・ イギリスには障害のある演出家やプロデューサー、アーティストが仕事をできるようにするための「アクセスワーカー」という職業がある
 - ・ 本気でプロフェッショナルを目指しても、美術分野（や音楽分野）と違って収入にはなかなか結びつかない。それでも芸術性の向上を目指してやっていくしかない
- **当事者リーダーの必要性**
- ・ 2020に向けて、イギリスのジェニー・シーレイ氏（ロンドン・パラリンピック開会式の演出家）やジョー・ヴェレント氏（アンリミテッド・プログラムのシニア・プロデューサー）のように、国を出て活躍する、若い世代が目標とできるような「当事者リーダー」を生み出すことが必要である
 - ・ ジェニー・シーレイ氏の当事者リーダーとしての積極的な活動
 - ・ 障害者関連の意思決定の場に、当事者リーダーが参画することが重要である